

未だ新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の収束気配が見えて参りませんが、会員の皆様方のご健康を心より祈念する次第であります。

新型コロナウイルスの流行によって、我々自身が生命身体の危険に晒されるようになり、平生の平和で長閑な日々が忽ちにして失われ、日常生活にも大きな支障が起きています。この感染症が何時、どのような形で収束するかを見通すことはできませんが、時代を Before Corona（BC）と After Corona（AC）の二つに分けた場合に、新型コロナウイルスの無症状病原体保有者からの感染、3密（密閉空間・密集場所・密接場面）での感染リスク拡大、重症化・死亡リスクの高さ等の特徴、および対症療法しかない状況下での世界的な感染拡大によって、現在の経済や社会に大きなしかも非連続の変化を与えることが予想されます。我が学会が掲げる地方自治研究の分野も、おそらくその例外ではないでしょう。

当学会はこのテーマに取り組む責務を負いますが、感染が広がっているさなか、我々自身が予防に追われる日々であり、まだその状況ではありません。ただ過去を振り返ると、日本は天然痘、麻疹、コレラ、スペイン風邪など、過去にも幾度となく感染症に襲われ、それに対処してきました。その経験から幾許かのことを学ぶことができます。

20世紀末から本格化したグローバル化は、日本の経済や社会に大きな影響を与えてきましたが、広い意味で捉えたグローバル化は、現在に限られたものではなく、長い歴史の下で何回か繰り返されてきました。周囲を海に囲まれた島国日本にとって、グローバル化は貿易や交流による国家の発展を導くと同時に、疫病等の災厄も招いてきました。日本では天然痘が6世紀に流行し、その後も周期的に流行したほか、10世紀に始まる麻疹の周期的な流行がありますが、パンデミック（世界的流行）に巻き込まれたのは、江戸後期の文政5（1822）年、安政5（1858）年、文久（1862）年の経口感染症であるコレラの流行からと言われています。コレラの次の流行は明治10（1877）年です。

外国への開港間もない神戸の様子を記述した『神戸開港三十年史』によると、開港当初ほぼ毎年のように疫病が流行し、当地の人々の生命を奪うとともに、人々を不安に陥れた様子とその対策が次のように記されています。

「兵神（兵庫神戸）両港の人民をして、大に衛生思想を發揮せしめたるは明治十年に在り。同年九月西南の戦役少々其の終局を告げ、凱旋の軍卒続々帰來するや、虎列刺病は彼等と共に入り來り、同月二十二日兵庫港碇泊船中、数時間の内に七名の患者を出し、其四名は忽ちにして斃る。此に於て予防心得を發し、海岸通三丁目に兵庫県検疫委員を出張せしめ、人民一般へ鯉、蟹、其他不消化物の売買を禁令し、入港船舶を検疫し、諸祭典諸興行の執行を見合はすべき旨を論して、社会的交通遮断を行ひ、吉田新田へ避病院を設け、和田岬へ病室を暇設して、軍人の虎列刺患者を入らしめ、市中の疾病者は、其病性奈何に拘はらず、死去埋葬以前に於て、検疫委員の検査を受けしめたりき。是より先き三四月の交、天然痘の流行ありて、人心不安の思ひを為せし折柄なれば、人民甚だしく畏怖の念を發し、大に衛生の忽せ

にすべからざるを解す」(村田誠治編『神戸開港三十年史・坤』開港三十年記念会 p. 530-531)。

「殆んど毎歳の疫病流行は、上下一般の市民をして、命あつての物種なりとの、感覚を強めたるや明らかなり」(同 p. 542)。

公衆衛生の重要性が認識され、国や地方の施策に取り入れられたのは、明治10年のコレラの流行からだと言われています。人々のコレラに対する恐怖と不安の大きさがうかがえるとともに、当時と現在で事情は異なるものの、検疫、社会的距離、患者の隔離と収容のための伝染病院など、基本的な対策は、新型コロナウイルス対策として現在進められている内容と大きく変わらないことを知ることができます。

ただ我々はこのような感染症を幾度も乗り越えてきた歴史があります。細心の予防措置と医学的な面からの解決によって、一刻も早い感染症の収束とこの危機的状況からの脱却を願うものです。



(以上)